

時雨 真城 蘭郷

きらきらと夕日に映えて村時雨
内陣に香煙こもり山時雨
音もなく降っては止みし片時雨
峰寺や時雨るる中の護摩法会
峰寺の時雨を鎮め護摩煙

沖繩 小島 小汀

首里城の朱のあざやかさ秋高し
秋深む島空の青海の藍
蛇尾線の秋の音色や「涙そうそう」
珊瑚礁淡く白みし秋の潮
海青く花なき島の台風禍

忘年会 早村 春鶴

若き娘の席華やいで忘年会
獵犬の声近くなり銃二発
北の空湧き出づ冬の黒き雲
ワイパーにいつしか霰拂ひをり
くじ引きで席定まりぬ忘年会

兄と孫と 一谷 春窓

吾が進む道を恵方と思いきる
元日の鏡にうつる孫多し
吾が膝を奮ふ炬燵の孫と猫
虚しさを埋むるもの無し冬日向
紅の葉の散るやうに兄逝きし

御霊祭 東 素子

御霊祭収め霰に見舞われし
三十年隔て父娘の冬御霊
名優をも偲ぶ面影小春空
ゆめづくし扇にたくす寒灯
金扇漆扇のゆめ春待月

秋の蚊 武部 春浦

布団干す屋根に居眠る親子猫
秋の蚊の塵の如くに来て刺せる
老い先を数えつつ買う炬燵かな
きゆるきゆるる雁鳴き渡る頃となり
水面を打ち走るもの鴨の陣

冬 董 白原 博泉

甘酒を振るまふ店や冬董
真直ぐな滝を彩る散紅葉
短日や朝の雲脱ぐビルの街
坂道を上れば人語冬深し
寒鯉の池は陽射しの中にあり

シクラメン 山本 春英

小さくともシクラメンなり凜と立ち
冬の雲朝日に散りて晴れ渡る
わが人生しあわせなのか「書」に対す
小春日や犬友会積犬知らず
冬の橋自転車少女渡りきる

秋日和 久保 春玉

秋日和糊を利かしてシート干す
境内は荒れたるまゝに神の留守
風邪気味の耳に突然電話音
公園の桜紅葉の散りはじめ
風邪薬飲めば睡魔のやってくる

長き夜 田中由つこ

悲しみよこんにちはハンカチの縁飾り
郵便局までが遠くて日の盛り
声だけは覚えてをりぬ巴旦杏
九月一日店頭にビスコの積まれ
長き夜の理科系の人語る語る

玄遠俳句 2月号

去年今年 真城 蘭郷

虚子学ぶ道終りなく去年今年
老いといふ文字身に添ひ来去年今年
夢の中にも句作り去年今年
耳うとき独りの世界去年今年
穏やかに刻移るべし去年今年

枯尾花 小島 小汀

枯尾花川原を風の駆けのぼる
ビル二つ越えて遠山冬霞
冬帽子いつしか身に添う心地かな
独り居の暖房強くして憩ふ
年の瀬の買い足りぬものかぞえつつ

初明り 早村 春鶴

ほんのりと初明りして山の神
元日も平日のごと目を覚ます
七種のすずなすずしろ我が菜園
近道を雨のこぬうち宵戎
成人の日の行事とて神詣

探梅 一谷 春窓

初詣見よう見まねの子の祈り
端書きに一句を添えて寒見舞
繰り返す波の浮沈に鴨の群
探梅や鶏の鳴き声東籬より
籠鳥と日溜り分かち春を待つ

屠蘇祝 東 素子

ゆったりと齡重ねて屠蘇祝
休眠と消息のある賀状かな
落日は首都を沈めて凍てし影
川むこう凍てし夜景にスカイツリー
屹立の富士残照に影凍り

龍の玉 武部 春浦

リュウノヒゲ玉抱きしや緑濃し
潮の香や日向を追ふて靴を干す
娘来る日を数え待つ松の内
日向ぼこする暇もなし孫の守り
親と子の往来に暮れて年新た

初みくじ 白原 博泉

初詣で八坂神社の石畳
寒禽や枝を移して羽づくろい
雨止みて破魔矢の並ぶ社かな
初みくじ傘立て掛けて開きけり
寒梅やせせらぎを聞く巷橋

初詣 山本 春英

初旅といえど本心「願」かけた
山茶花の白の散り敷く初詣
愛猫の初毛づくろい見てゐたり
初夢は白鳥飛来せし我が家
願かけの無言で歩く初詣

花八ツ手 久保 春玉

わが庭の八ツ手花咲く癸・巳
実千両安らく我がそこにいて
独り居の短日といふ時間割
メモ帖と雑誌一冊冬炬燵

花野 田中由つこ

烏瓜文字小さくて読めませぬ
爽やかやもう直ぐお腹が空いてくる
笑ふ眼に涙滲みて秋の蝶
目に晒す化粧も恥の上塗りも
集団少し離れて行く花野

剪定 真城 蘭郷

青空に顔突き出して剪定す
剪定の希望つなく芽捨て去る芽
叩くほどあらぬ炎や芝を焼く
踏みまどひ踏み迷ひゆく雪解道
根を張って大地ゆるがぬ寒椿

凍星 小島 小汀

冬薔薇晴れ渡る空あおきおり
一輪のたんぽぽの黄の冬田かな
凍星やはるかなる風荒れしこと
水仙の海の日射しを存分に
夜べの雨冬の小草を立たせおり

立春 早村 春鶴

春立つや頭上の空の色軽く
立春と思へば今日の明るき陽
麦踏の遅々として人二人づれ
かたくなに旧正守る過疎の村
青空の恋しき日々や浅き春

春の声 一谷 春窓

トンネルの出口に夕日雪の国
御神渡諏訪の地酒がのどに沁む
鯉跳ねる音に聴きたり春の声
梅日和けふはいいことありそうな
床の間を師の書に替へし春座敷

浅き春 東 素子

右手吊る夫の無聊や春迎ふ
夫の気を癒し代筆冷え持つ春
ままならず読書三味浅き春
白花弁残心包み落椿
白梅に風の光は添う如し

春浅し 武部 春浦

玄関に捨て置かれたる風ひとつ
飛行雲冬空まるくひろきかな
水鳥や時雨れて止みて日射しをり
ひとときを懐炉代わりに猫抱いて
姿無く鳶の声して冬の雲

冬すみれ 白原 博泉

春待たず妹はひとり旅立ちぬ
早春の雨に送られ旅立ちし
笹鳴や故郷の土に還られし
山茶花や妹と別れの雨の中
末っ子が先に逝きしよ冬すみれ

日脚伸ぶ 山本 春英

稽古終え子等は散りぢり日脚伸ぶ
薄氷のなかの赤土美しき
父と子と母を見舞いて春を待つ
無菌室に入りて旬日日脚伸ぶ
献血を呼びかけている春浅し

年新た 久保 春玉

古屏風の佳き思い出に年新た
神棚に明り灯して餅供え
お雑煮は白味噌仕立て年新た
年玉を子より貰ふて年新た
鍋奉行嫁が務めて年新た

雛の市 真城 蘭郷

個性ある面を選ぶ雛の市
煌々の灯に溺れゆく雛の市
品定め出来ぬ日移り雛の市
値札気になる一巡の雛の市
雛の忌として偲ぶ日でありにけり

残る鴨 小島 小汀

春雪の音もなく降るガラス越し
天窓に月光々と冴返る
堰止めて川面豊かや残る鴨
春めける心も弾み歩も軽く
春の風邪のどに痛みを残しつつ

水温む 早村 春鶴

一段と瀬の音高め春の水
春山を身にまとひつゝ、柚の径
田を横ぎる足跡乾く春田かな
夕東風や自転車押す児息荒げ
球を打つ音の響びきて水温む

春を待つ 一谷 春窓

同郷と知り酌み交わす温め酒
つもりなく寝てしまいきり春時雨
迷ふことなく雪よけて泥を踏む
再会は待ち焦がれぬし春に似て
国政の話持ちきり農具市

震災の一本松 東 素子

鎮魂の祈りとどけよ松萌ゆる
震災の整地進まず春荒る、
「何もない！」悲痛の声に春冷ゆる
白梅の散る花びらを見ている猫
風光る仔猫寄り合ふ塀の上

天草の春 武部 春浦

枇杷の木の在りし株跡冬日射
日当りを賞めて人行く木瓜の花
桜餅うぐいす餅も買いにけり
春が来た四方の窓を開け放ち
海光り鳶舞う空の深さかな

風車 白原 博泉

梅林の空の青さにみちびかれ
春コートしなやかに揺れ女坂
白川を寄り添ふて行く春の旅
風車風に息あり悲しけれ
風の来て止まりて静か風車

春近し 山本 春英

野の匂ひ山の匂ひや青き踏む
無人駅山の匂ひを運び来る
書き籠る臨書三味春近し
母の無事祈りて子等の雛眠る
母見舞ふ笑顔の母子春近し

おみくじ 久保 春玉

おみくじを結びし枝垂れ梅低く
呼び止めて帽子とマスクしたる顔
空き部屋床の一輪春時雨
春時雨母はこの頃弱気とも
ほんの少し粥をすゝりて春の風邪

春水 真城 蘭郷

春水に育つものみな美しく
棚田道水路ささやく春の水
散策の春の水音聞く辺まで
離陸して空港島の灯の朧
雨に発ち陽炎の中着陸す

お水取り 小島 小汀

夜を染める炎の祈りお水取り
山茶花と梅散る小径一歩づつ
こんにちわ子等の挨拶春うらら
たつぷりの雨を含みし草青む
紅梅や青く澄みきる朝の空

夕櫻 早村 春鶴

咲き満ちて池面明るき花の宿
研修を終へて宴や夕櫻
散り急ぐ大坂城の花吹雪
夜桜の明り届かぬ老大樹
里山に明りの見へて夕櫻

仏生会 一谷 春窓

仏生会履いて磨きし夫の靴
彼岸会や夫とのなれそめ話など
亡き夫の小咄をしてお中日
解氷の湖を傾け鳶自在
湖風にそむきし鳶や山笑ふ

花見 東 素子

そよ風や万朶の桜解きほどこき
慣例の花見の宴右手吊り
花片浮く盃傾けむ花見かな
花の下今日を惜しみて琥珀酒
リハビリに付き会い花見幾度も

小雀 武部 春浦

小雀の軒端より一羽二羽三羽
散水の畑に春の虹生まる
春嵐大樹に籠る鳥の声
一株の菜の花残し耕せり
一軒家残る荒地や春霞

初燕 白原 博泉

城門を越えゆく朝の蝶かぞえ
風車まはれ現在過去未来
たんぽぽやそれぞれ宙を謳歌して
初燕ラジオ体操始まりぬ
チューリップ花束になり抱かれゆく

春 山本 春英

葛城の全山桜林泉を抱き
遊鳥は花の中なり花こぼれ
物売りの車は春を駈け抜ける
癌に勝ち春の病棟目に優し
朝市の小買物して花見客

絵馬 久保 春玉

カラカラと願いの絵馬に春の風
吹く風も人の心も春の風
三姉妹話のはずむ桃の花
出嫌いが誘われ梅見西の丸
昨日より今日暖かし花見頃

燕 真城 蘭郷

覺越え行方自在のつばくらめ
巢作りの燕寝るまで憩ひなし
つばくらめ地上寸前ひるがえる
大空の風を躲してつばくらめ
岩つばめ河口に棲みて沖知らず

柿若葉 小島 小汀

青空にひときわ清し柿若葉
春耕の畝黒々と広がりし
宙を舞う燕をしぼし目で追いぬ
三寒のようやく四温とりもどす
白木蓮咲く街路樹の夜空かな

新緑 早村 春鶴

新緑の風吹きぬけて柚の径
山の色木々それぞれに新緑に
手伝ひをする児遊ぶ兒子どもの日
伸び過ぎし筈早も青き肌
瓜苗の支柱の太きに届かざる

鯉のぼり 一谷 春窓

庭の端を古墳掘ること耕せり
振り上ぐる鯉のきらめき初蝶来
雨の来て妻籠泊りの五月間
鯉のぼり家紋の入りし屋根瓦
心地よき子守り疲れや藤寝椅子

薄暑 東 素子

身軽なる服に着がえて街薄暑
伸び初めし梅の若枝伐る薄暑
陽を弾き榉若葉の明るさに
やわらかく陽をはね返し柿若葉
路地の脇に頭をもたげ茗荷の子

赤提灯 武部 春浦

おぼろの夜護岸工事の忘れ物
春の夜の赤提灯のゆれており
山若葉青葉鳶の輪現われし
溪川の音こだまして青葉宿
目つむれば青葉を渡る山の音

都踊り 白原 博泉

囀りや集団下校の列乱れ
田螺鳴き道の長さを競ひ合ふ
ヨイヤサー都踊りの幕上がる
バス待ちの人の列より蝶生まる
ベランダの鳩追ひ払ふ春の昼

春眠 山本 春英

野遊びは淀の堤のバーベキュー
つくし買ふかつらぎ山の朝の市
「通り抜け」押し出されたる花見客
春眠を破る目覚し止めて寝る

桃の花 久保 春玉

口紅の乗りのよき日や桃の花
久々に三人姉妹桃の花
花吹雪あなたの髪にひとひらが
地下鉄を上げれば空は花曇
花曇り句でも拾いに出かけるか

蛍飛ぶ 真城 蘭郷

雨催ひながら風なく蛍飛ぶ
葉にひそみ吐息ばかりの恋蛍
蛍呼ぶ子等の声する橋袂
蛍飛ぶ闇の真中を極楽に
杜影の深き淵より湧く蛍

五月晴れ 小島 小汀

つつじ山雲流れゆく空の果て
柳絮とぶ河畔の風に髪乱れ
五月晴れ空に一線飛行雲
母の日の娘に誘われて音楽会
目で追いし白蝶の河渡りきる

草茂る 早村 春鶴

花苗のいつしか消され草茂る
草茂るガードレールの見えかくれ
草丈の高き晩夏の休耕田
満身に十葉の香持ち帰る
螢にも好みの宿の樹のありて

蛙鳴く 一谷 春窓

つがひ蝶観音様の掌に遊ぶ
梅雨冷えや一字違えし由緒書き
晩学の吾に付き合い蛙鳴く
古民家の天井高し避暑の宿
百姓に徹せし恩師藍緋

梅雨と朝顔 東 素子

初咲きの朝顔梅雨に耐えてをり
梅雨荒る、風と雫と朝顔と
梅雨雫抱いて朝顔しばみ初む
文字摺りの紅のひとすじ散らし書き
凜とした紅の風格振り花

青嵐 武部 春浦

青嵐カッパルバイクのツーリング
電線の五線譜わたる五月風
幻の田んぼ捜しけり蛙鳴く
温泉煙りや青葉の陰のかたつむり
枝を折る音に鳥影巣をつくる

菖蒲 白原 博泉

迸る水の音聴き花菖蒲
梅雨鴉道端に立ち貌険し
どくだみや広がり止まぬ峠みち
一日の終わりは甘き枇杷する
白菖蒲うす紙のごと吹かれをり

こうの鳥 山本 春英

こうの鳥植田に降りて但馬バス
こうの鳥植田に舞ひて山低し
こうの鳥尋ねる一ト日賜りし
かるがもの母子の泳ぎスーイスイ
頂きし豌豆炊いて豆の飯

あじさい 久保 春玉

あじさいや神に召されて母逝けり
お別れは紫陽花の庭ごま豆腐
着道楽母の晴衣の更衣
六地藏頭巾揃えて梅雨ぐもり
夏の蝶ワルツの如く風に舞ひ

玄遠俳句 8月号

梅雨 真城 蘭郷

草の伸び頭痛の種となる梅雨入り
ひろげたる番傘の洪匂ふ梅雨
憂しとせず梅雨を愉しむ生き方も
梅雨晴れに庭木移植のひと日かな
遠雷の梅雨明け告げてをりにけり

紫陽花 小島 小汀

家事終えて藤椅子に身をゆだねたり
梅雨ごもり小説二冊読みおえし
紫陽花や大まり小まり雨の色
梅雨の河身じろぎもせぬ鷺一羽
夜に入りて梅雨雷のうちふるう

露涼し 早村 春鶴

早朝の露を涼しと田を巡る
菜園を見廻る足に露涼し
空席の目立つ終電夜涼かな
大夕立止みて野猿の群動く
妻逝きし友より暑中見舞かな

蟬時雨 一谷 春窓

遺跡へと夏草の径阻まれつ
村繋ぐ峡の木の橋湧き清水
惜しみなき今生の聲蟬時雨
思い切りボール蹴る子や夏燕
五人なる孫引き連れて盆踊

翡翠 東 素子

翡翠の飛翔にカメラシャッター音
翡翠の色鮮烈に遊水池
捕虫網忘れられるし日の暮るる
源氏螢文学に見る光呼び
ほおずきや赤き実に解くわだかまり

紫陽花 武部 春浦

すだれ買い掛ける場所無く仕舞いけり
薄衣トンボ藍色海の色
品定めして西瓜買う老夫婦
初めての梅漬け終わり瓶覗く
大輪の紫陽花切りて丈足らず

行者滝 白原 博泉

どくだみや犬鳴山の行者滝
浴衣着て楽しむ加茂の流れかな
水馬リズム刻んでゐる如く
三室戸寺あじさゐの雨降り続く
日射し濃く六甲の薔薇咲き誇る

銀座展 山本 春英

夕立晴銀座画廊の人増えし
梅雨明けというふ炎天の銀座裏
体調如何後ろ姿の夏帽子
トンネルの間に黄金の麦の秋
弾き終えし子を見送りて月涼し

夏来る 久保 春玉

筍をやわらかく煮て年重ね
筍を一枚はがし過去思ふ
藤棚の影を求めてひと休み
バラ園のバラを背にして写真撮る
女四五人話のはずむ夏来たる

乳色 田中由つこ

梅林少し斜めにお母さん
青芝や万年筆の初使い
教会の壁の乳色春灯
手を洗ふことの楽しく五月来る
無香料無着色化粧水緑雨

きりぎりす 真城 蘭郷

終の色はかなくなりぬ七変化
草深き宿の枝折戸きりぎりす
菜園の朝の静寂のきりぎりす
きりぎりす朝の網戸にすがり鳴く
水澄みてまことまほろばなる故郷

蝉しぐれ 小島 小汀

夕立に叩かれ家路走り着く
人、人、人世界遺産の夏の峰
川渡るほどよき声や蝉しぐれ
から梅雨の川の流れの音たてず
時おりの風鈴の音に風を知る

立秋 早村 春鶴

秋立つ日野猿を追ひて陽の暮る、
野良着着て心引きしめ今朝の秋
窓開けて風とり入れて今朝の秋
七夕に何を願ふか園児の字
初秋や四号岸壁外国船

新盆 一谷 春窓

新盆や兄の望みし男の子あり
健康が宝物なり夏衣
団扇止めてわが句幾度そらんずる
敗戦日語りし父の星仰ぐ
人生観変わると友やちちろ鳴く

蝉の声 武部 春浦

七夕の小さき笹波商店街
瓶の中水草のみの澄みわたり
夕暮るる時を惜しみて蝉の声
蝉しぐれ唯ひたすらに鳴いてをり
夏富士は雲の布団を敷きつめて

母卒寿 白原 博泉

小さき掌の素速^{すばや}き男の子縞蚊打つ
汗の玉はじき飛ばして日焼けの子
夏書きする卒寿の母を見舞ひけり
若竹が色添へ道の駅満車
小屋脇に蛇のぬけ殻夏の昼

空蝉 山本 春英

ころころと転がる蝉の水辺まで
空蝉をそっと拾ふて仏壇へ
また一人逝きし知人や盆暑し
来客の帰りて広き部屋暑し
阿波踊りふと寂しさのある刻も

母逝く 久保 春玉

無花果や父追ふ如く母逝けり
茄子漬ける記憶の中の母の笑み
母まつる潮騒を聞く夏座敷
遅咲きの鉄線開く梅雨晴間
ハンカチの白のまぶしき炎天下

茉莉花 田中由つこ

茉莉花や先端丸き硝子ペン
要領の悪いのもゐて燕の子
箒にて掃く明易の奥座敷
広口瓶^{びん}青梅のツブヤキ始まりぬ
青葉濃し宝塚劇団男役

新涼 真城 蘭郷

新涼の星と語りぬ二夜三夜
新涼や目覚めし如く星の綺羅
新涼の花壇あちこち杖欲しく
法隆寺訪ねて偲ぶ子規忌かな
大食にして瘦身の子規まつる

朝顔の花 小島 小汀

歓声や花火の空の七重八重
待ちわびし朝顔一花初々し
飛行機の花火の空を横切りし
風鈴に音の生まれる夕軒端
葉がくれに鳥の憩へる夏木立

彼岸花 早村 春鶴

理由もなく刈り残したる彼岸花
突然に畦を彩る曼珠沙華
墓地参道燃えたつ赤の彼岸花
台風の去れども帰宅まゝならず
次々と見舞の電話秋出水

葛紅葉 一谷 春窓

腕を欠く男の塑像葛紅葉
石蹴つて目で追ふ行方秋落暉
雀翔つあわただしさや秋の雷
目を細め読む菓効や秋時雨
菊日和母の使ひし三味を抱く

チチロ鳴く 東 素子

虫の音の一斉に止む間のいのち
邯鄲の際立つリズム闇深し
角を折れ路地の行手にチチロ鳴く
輪島塗に時のあわいの菊きく臍なま
菊酒のほろりとはじけしみ入りぬ

虫の声 武部 春浦

山百合の背丈ほどにも伸びし山
幕引きの雨に降られて夏祭
鳴き継いで吾に従う虫の声
星の夜の星のきらめき地に消ゆる
約束の杭に止まりし赤とんぼ

女郎花 白原 博泉

仏前に菓子を供へて秋を待つ
亡き妹と語り合ふ夢秋近し
女郎花風に吹かれて香を放ち
秋隣モーツアルトに聴き入りぬ
朝顔の蕾明日咲く花の色

音楽会 山本 春英

ちちろ鳴き迷ひし径を教えられ
コンサート終えて月夜の街に立つ
夕月夜開場待ちて並びをり
コーヒーは熱きものなり初の私
秋めくやピンクのパジャマたたみ込み

百日紅 久保 春玉

仏前の花ごぎを汗流し拭く
百日紅白衣美人の二人かな
言えばただ暑い暑いと髪洗ふ
幹に爪立てて空蟬そこここに
風鈴の短冊風を待つばかり

秋さびし 田中由つこ

秋さびし六十秒の長過ぎる
ドアノブに入室禁止や雁渡
立冬の朝粥の椀光りをり
霜便り固定電話に起こさるる
黒きものばかりを詰めて眠る山

望の月 真城 蘭郷

軒の端に月白及び供華の影
灯を消して明窓浄机望の月
今生に見る今日の月忘れめや
仲秋の月一片の雲もなし
明月や八十路を過ぎて偲ぶ人

満月 小島 小汀

煌々と満月のみの空高し
満月に飛機点となり通り過ぐ
あぜ道の茎の高さや曼珠沙華
ようやくに大輪となり菊に住む
秋風に立話する夕散歩

秋晴れ 早村 春鶴

秋晴れて書展の中の小宇宙
秋晴れて親子競技に弾む声
鈴なりの渋柿野猿目もくれず
匂ひまだ放ちてをりぬ千銀杏
林道のいつしか柚径木の実降る

紅葉宿 一谷 春窓

長台詞前の空咳村芝居
紅葉宿孫の土産をまず先に
紅少し指せる楓の初紅葉
七五三此度はいづれの孫なりし
兄嫁と今宵我が家でおでん鍋

良夜 東 素子

十六夜の月は川面にゆらめきて
詩の中に心遊ばせ月仰ぐ
秋深し若き躍動見てをりぬ
秋の燈を宙に集めて枝決まる
着地まで枝の決まりて秋灯下

秋日誌 武部 春浦

かなかなや日落ちて始む庭仕事
運動会オリンピックを指す子等
ボイジャーは宇宙の果てよ月仰ぐ
秋深し空を見上げること多く
洋菓子も和菓子も栗のニューモード

秋日和 久保 春玉

秋日和応援の声途切れ途切れ
母逝きてひとり松茸飯を炊く
柚子味噌を小皿に乗せて豆腐食ふ
行く秋やなさねばならぬ事多し

夜長 山本 春英

姿勢よく白きカールの彼岸花
夜泣きの児泣き止みてわが夜長とも
名月や音なく過ぎる救急車
「生きようね」仔牛生まる、初の秋
まげ結えぬ新入幕の秋相撲

寒牡丹 田中由つこ

凍てる部屋遺影の角度正したり
母らしく母は逝きたり寒牡丹
何を食べやう寒晴れの日曜日
ボタン屋のボタンの静か春一番
スサーナの「アドロ」や春はまだ名のみ

秋 桜 真城 蘭郷

霊場をとりまく棚田落し水
言霊のささやく峡の落し水
一振りの鍬に走りぬ落し水
滞船の黙す港の時雨かな
風いつも何処かにひそみ秋桜

菊日和 小島 小汀

予定なき清閑の日や菊日和
つい見とれ岸边を染める彼岸花
数えたくなるほど熟れて実南天
秋雨の淋しさつの夜更けかな
見上げた空の深さよ秋惜しむ

落葉 早村 春鶴

音もなく風と戯れいる落葉
昨日より厚み増したる落葉径
落葉して櫂は梢全て見せ
願ひごと絵馬に託すも神の留守
入念に神棚掃除神の留守

初炬燵 一谷 春窓

お日さまに預けし軒の吊し柿
露天風呂身に寄る紅葉掬ひけり
泣き疲れ寝てしまいきり初炬燵
湖を松が枝越しに冬日向
気がかりなボタンがひとつ初コート

はつふゆ 東 素子

蒸し野菜色取りもめで冬に入る
包み焼きのぬくもりを抱き冬来たる
突然の寒波襲来腕を組む
地平まで関東平野冬来たる
冷え込みに冬支度などして奈良へ

秋 祭 武部 春浦

秋高し大綱作りの藁叩き
大祭の先導役は秋の蝶
虫の音や闇に消えゆく人の影
虫の音と波打つ風と星空と
荒波や天草湾の月高し

ふるさと 白原 博泉

曼珠沙華ふるさとの畦曼珠沙華
石仏にコスモスの影踊りけり
霧雨の一ト日となりぬ文化の日
秋日傘迷ひ道して行き止まり
鶏頭の色数へ来て和紙の里

秋灯下 久保 春玉

木犀に似た者同志の集ひかな
書いて消す消しては書いて秋灯下
この露路を回れば我が家金木犀
定刻に電車来て去る秋灯下
借りし本開く楽しみ秋灯下

晩秋のフランス 山本 春英

そそり立つ塔院の秋昼の月
蔦紅葉出迎えくれしモネの家
水蓮の池を巡りて秋の旅
ゆつくりと明けゆくパリの空の秋
天高し回転木馬とエッフェル塔

河豚鰭ふぐひれ 田中由つこ

河豚鰭の正しき鰭として干さる
半畳ごと膝並びをり冬安居
林の奥へ奥へ水色のコート
眉強く描きて乾燥注意報
残業の夜や流水の接岸す